

道 -ROAD-

大阪学芸中等教育学校
校長室だより

「努力の壺(つぼ)」

元禄文化期に活躍した俳人松尾芭蕉の紀行文「おくの細道」は、次の序文で始まります。

「月日は百代(はくたい)の過客(かかく)にして、行(ゆ)きかふ年もまた旅人なり。…」

(月日というのは、過去から未来へ百代にわたるほどの永遠の旅人のようなものであり、来ては過ぎる年もまた旅人のようなものである。)

芭蕉が奥州に向かう心境は別にして、この書き出しは師走にちょうど良い響きです。

月日の経つのは早いもので、本日二学期の終業式を迎えました。二学期は、遠足やマラソン大会などの行事の他、3年生はオーストラリア研修旅行、5年生はヨーロッパ修学旅行にかけました。様々な行事や取組みがあり、多くの成果を収めることができました。

6年生は考査の翌日から早速大学入試対策講座が始まっています。これから卒業そして進路を獲得するまでの期間は、これまで最大の試練だと思えます。これを乗り越えることが皆さんの人間の幅を一回り大きくします。健闘を祈っています。頑張ってください。

また、他の学年は明日から冬期セミナーが始まり、多くの生徒が登校します。三者面談も控えています。中々、冬休み気分にはならないと思いますが、時間を有効に使い充実した生活を送ってください。

さて、冬休み中に新しい年 2018 年(平成 30 年)が幕を開けます。この一年を振り返り、新鮮な気持ちで新しい一步を踏み出したいものです。そこで、「努力の壺」の話を紹介したいと思います。人が何か始めようと決心すると、神様が「努力の壺」をくれるそうです。それは子どもがそのまま入ってしまうような大きな土製の壺です。その壺に「冬休みは毎日 90 分以上勉強する」等と書いて貼ります。この札こそが抱いている【目標】です。その壺に一回実行するたびにコップ一杯の水を入れます。つまりこのコップ一杯の水が【努力】なのです。

最初のうちは水を入れても、壺の中の水が増えた気配すら感じません。どれくらい水がたまったかを見たくてもうかがい知ることはできません。人間には弱い心があるので、「どんなに頑張っても進歩がない」「無駄なことだ」と自分自身の努力に疑問を持ち、コップに水を入れることをやめてしまうこともあります。ここがしんどい所です。

でも頑張ってみます。ある時、水を入れると「ポチャン」と音がして、音が変わってきたことに気づきます。確かに水がたまっていると知る事ができるので、水を入れることが楽しくなります。今までは、一杯の水を入れるのがやっとだったのに、「たまってきている」と実感できたことで、二杯分、三杯分の努力を惜しみなくできるようになります。やがて、水があふれだし、目標が達成できた時がきます。この時初めて「努力を続けることの大切さ」を知ることができるのです。「継続は力なり」です。

今日の終業式では「木の水槽に落ちたネズミ」の話もしました。皆さんは困難に出会うとやめていませんか。また、ちょっとしんどい事に出会うと、すぐにあきらめて違うことをしていませんか。努力の壺に貼られた札を見失いそうになったとき、「もう少し入れ続ければ、きっと水があふれ出すはずだ」と思ってあきらめないで欲しいと思います。

日々の生活に流されず、新しい年を迎えるという節目にあたり、「夢」を持ち努力を続けることで自分の成長につなげてください。3学期の始業式、1月9日(火)には希望に輝く元気な顔で会いましょう。